

羨望の怪物

桜人 心都悩

【登場人物】

- 秀人 … 主人公
美桜 … 秀人の彼女
直紀 … 秀人の先輩。優しく、お茶らけている。
七海 … 陽気な女子高生
有希 … 内気な女子高生
彰 … 就活生
花野 … キャリアウーマン
祥吾 … 新人バイト
藪医者 … 脳整形外科医
男1 … 花野恋人、セクハラ会社員
男2 … パワハラ上司、医者
女1 … 七海母・その辺を通りかかった女子高生1
女2 … 有希母・その辺を取り掛かった女子高生2
- 【舞台】
店 ↓ 個人店のカフェ。大きくはないがコーヒーや紅茶、スイーツが美味しい店。
病院 ↓ 整形外科。

【本編】

舞台中央には椅子が5脚設置されている

日が昇る（朝）

高校生四人（七海と他三人）下手から上手に登校する
四人の後ろから有希が憂鬱そうに登校する

上手から下手に向かって面接に向かう男性（彰）
上手から下手に向かって通勤する女性（花野）

下手から上手に向かって歩く直紀
祥吾、高校の制服を着て通学する

全員がいなくなる
日が赤くなる（夕方）

下手から秀人が走ってくる
上手から直紀が歩いてくる

直紀「今日も遅かったな。何分遅刻だ？」
秀人「すみません……寝坊して」
直紀「早く着替えてこい。店長、カンカンだぞ」

秀人「はい……」

下手から七海が来店

直紀「いらっしやいませ」

七海、椅子に座る

秀人、制服に着替えて出てくる

七海「すみませーん、注文いいですか？」

直紀「はい、秀人、行ってきました。俺、料理運ぶから」

秀人「ご注文、お伺いします」

七海「オレンジジュースとストロベリーパフェ一つ。

あつ、ここって充電できますか？」

秀人「えっと、すみません、ちょっと聞いてきます」

秀人、直紀に駆け寄る

秀人「先輩、すみません。充電ってできますか？」

直紀「あー、コンセントはテーブルの下だぞ」

秀人「すみません」

秀人、椅子まで戻る

秀人「お待たせしました。

テーブルの下にコンセントがございます」

七海「ありがとうございますーす」

秀人、直紀のところまで戻る

直紀「……秀人、注文は？」

秀人「あ……えっと、オレンジジュースと、えっと、

ブルーベリーパフェです」

直紀、下手にはけてパフェを持ってくる

直紀「お待たせしました。ブルーベリーパフェです」

七海「……え？」

直紀「どうしましたか？」

七海「いえ……ありがとうございます！」

日が暗くなる（夜…椅子にスポット）

日が変わると同時に七海、上手にはける

秀人、七海が座っていた椅子に座る

直紀、椅子の近くに立つ

直紀「秀人お」

秀人「はい」

直紀「メモ、ちゃんと取ろうな……」

秀人「はい」

直紀「アラームもちゃんと掛けような」

秀人「はい」

直紀「お前、うつかりが多いんだよなあ。

そこが治れば完璧なんだからさ」

美桜、上手から歩いてくる

秀人のバイトが終わるのを待っている

直紀「やればできるんだから。お前のこと信頼してるんだぞ？ がんばろうな。明日は遅刻するなよ」

秀人「はい」

直紀、下手にはける

美桜、秀人に近づく

その手にお菓子が握られており、一つ秀人に差し出す

美桜「しゅーと！ どうしたの？ めっちゃ元気ない

じゃん。お菓子食べる？ 今日はドーナツだ

よ！」

秀人「ごめん……えっと、また寝坊しちゃってさ」

美桜「あー」

秀人「前に教わったこと忘れちゃったり、注文取り違

えたり。ミスが多くて」

美桜「うんうん」

秀人「先輩に紹介してもらったバイト先だから、申し訳なくてさ」

美桜「でも、今回はちゃんと長く続いているじゃない」

秀人「今までは短期だったから。そのうちクビにされ

そう怖い……」

美桜「きつと大丈夫だよ。そりゃ、秀人はうつかりさ
んだけど、細かいところまで気配りがよくでき
てるし、接客向きだと思うよ」

秀人「そうかなあ」

美桜「それにさ、まだ半年も働いてないじゃん？ わ
からないことが多くても仕方ないよ。ゆっくり
やればいいんだよ」

秀人「……うん」

美桜「一つ一つ、ね！ 今日はまずちゃんとアラム
掛けよう？ 必要なら私もモーニングコールす
るよ！」

秀人「そこまでは大丈夫……だと思う。ありがとう、

美桜」

美桜、はける

秀人、椅子から立ち上がる

秀人「ずっと、変わりたいと思っていました。

ダメな自分を変えたいと思っていました。」

自分のことでもいつも手一杯。

なにをやってもうまくいかなくて、物覚えも悪くて、周りに迷惑をかけてばかり。

いつか、周りの人に呆れられて、一人になっちゃう気がして。

そんな自分でも周りの人のために動けるようなヒーローのような自分になりたいと思ってきました。

いい歳して、かつこ悪い、願いですが」

秀人、ポケットから通帳を取り出す

秀人「こんな僕でも、変われる気がしました。

脳整形手術なら」

秀人、椅子に座る

医者、下手からカルテを持って登場する

秀人「……どうでしょうか。僕でも変われますか」

医者「はい、大丈夫ですよ。秀人さんは短期記憶が苦手なようですから、海馬の刺激受容力を高められるよう電気手術を行います。大脳辺縁系

の手術ですから少しだけ時間がかかってしまいますが、効果は絶大なはずですよ」

秀人「えっと、すみません。よく、先生の仰る意味が分からなくて……」

医者「つまりですね。脳の中にある短期記憶を司る部位に刺激を与えて、うつかりを治そうということですよ」

秀人「は、はあ。それでうつかりが治るんですね」

医者「まあそういうことです。最先端の医療で手術の成功例もあまり多くありません。加えて『整形手術』ですので保険等が効かず高額な治療費になっちゃいますよ」

秀人「大丈夫です！ 三年間、いろんなバイトをしてお金をためてきたので……」

医者「……そうですか。それならばあとは、ほんの少しの勇気があれば大丈夫ですね」

秀人「ほんの、少しの勇気……」

医者「いつでも大丈夫です。勇気が持てましたら、この同意書にサインをして持ってきてください。くれぐれも、よく内容を読んで」

秀人「はい……」

医者、下手へとはける

美桜、秀人のもとへ駆け寄る

その手にお菓子が握られており、一つ秀人に差し出す

秀人「美桜、整形ってどう思う？」

美桜「え、いきなりどうしたの？」

秀人「いや、整形って聞くとさ、周りからの偏見とかいろいろありそうだなって」

美桜「うーん、そりゃあ、いきなり顔が変わったらびっくりするよね」

秀人「整形したらさ、この顔偽物だなあとか感じる？」

美桜「どうしたの、そんなに。整形したいの？」

秀人「したいかと言われると、多分してみたいんだと思う。けど戻れないのが怖いなあって」

美桜「しなくていいと思うけどなあ。」

でも、私も美容整形してみたいなあって思ったことあるからその気持ちはわかる」

秀人「えっ」

美桜「プチ整形だよ？ 二重にしたいなあとか鼻高くしたいなあとか。まあ、結局しなかったけど」

秀人「……」

美桜「結局、メイクとか髪型変えたりとかで満足しち

やった」

秀人「……もし、僕が整形したいって言ったらどう思う？」

美桜「……どっちでもいいかな。だってどれだけ秀人の外見が変わっても、秀人は秀人だよ」

秀人「そっか」

美桜、秀人、上手にはける

日が昇る（朝）

七海、下手から上手に登校する

七海の後ろから有希、ゆっくり登校する

上手から下手に向かって面接に向かう男性（彰）

以前よりも疲れている

上手から下手に向かって通勤する女性（花野）
以前よりも疲れている

日が傾く（夕方）

彰、下手から登場し椅子に座る。

秀人、下手から出てくる

秀人「こんにちは」

直紀「おわっ……びっくりした。今日は遅刻しなかったんだな」

秀人「えっと、はい」

直紀「もし余裕があったら、早めに入ってもらっていいか？ 今日お客が多いんだ」

秀人「わかりました」

花野、来店し座る

彰、立ち上がり退店する

彰の座っていた椅子に忘れ物がある

秀人、テーブルを片付けに来て忘れ物に気付く

秀人「先輩、すみません。お客さんの忘れ物を届けてきます！」

彰、登場する

秀人、後ろから追いかける

秀人「すみません！ 忘れ物です！」

彰の肩をたたく

彰「……あ、すみません。届けてくださって、ありがとうございます」

秀人「いえ、間に合ってよかったです……あの、大丈夫ですか？」

彰「え？」

秀人「顔色が悪いです。どこか具合が悪いんじゃないか？」

彰「あ、ああ、えっと大丈夫です。この後会社に戻らなきゃいけないので、もう、いいですか？」

秀人「そうなんです……」

秀人、ポケットから割引券をだす

秀人「あの、僕には何もできないんですが。もしよろしければ、またぜひお店に来てください。待っています」

彰、割引券を受け取る

彰、秀人退場

秀人、お店に戻ってくる

花野、料理を食べ終わってテーブルに伏せている

直紀「よし、今日はもう終わりにするから、今店にいるお客さんに清算するようにお願いしてくれ」

秀人「わかりました」
数人のお客さんに声をかけた後、花野に気付く
秀人「お客様、お客様！」

花野、起きる

秀人「すみません、もう閉店のお時間で……。あの大丈夫ですか？」

花野は泣き疲れている

花野「ごめんなさい。もう、出ます。ごめんなさい」
秀人「……あの、良ければ、僕、この後帰るだけなのでお話を聞きますよ」

照明、変わる

秀人、花野、椅子に座っている
男1「仕事をやめて、家のことに専念できるようにしてくれないか」

花野「え？」
男1「異動が決まったんだ。大阪に行く。君にもついてきてほしい」

花野「今の仕事はずっとしたかったんだって、私、前に話した……よね？ その為に勉強したり資格取ったりしてたの、知ってるよね？」

男1「わかっている。でも君がその仕事が好きないように俺だってこの仕事が好きなんだ。
わかってくれよ。これは出世するチャンスなんだよ。仕事が好きなら、わかってくれるだろう」

花野「……全然、わかんないよ」

男1「女はこれから結婚とか出産とかしたら自然と仕事から遠ざかっていくだけだ。
それが少し早くなるだけだ。

結婚したら家に居場所ができる。俺の居場所は職場なんだよ。仕事なんだよ」

花野「貴方のことは好き。でも仕事は続けたい。これは、私の我儘なの？」

男1「花野さんさあ、申し訳ないんだけど、次から担当代えてくれるかな」

花野「……えっと、すみません。なにか、私に至らないことがありますか」

男1「君はよくやってくれてるんだけどさあ」

やっぱり、ほら、この仕事は信頼が大事だから」

花野 「信頼がない、ということですか」

男1 「いや、他の社員さんの方が説得力とか交渉力があつて、やりがいがあるんだよねえ。

長い目で見てもさ。君女性でしょ？」

早めに引き継ぐのつて大事だと思うんだよ」

男2 「花野さん？ 最近仕事に身が入ってないんじゃない？」

ない？ この書類、またミスしてんだけど」

花野 「すみません……あの、この書類、私じゃ（ないです）」

男2 「何度目だよ。このミス直してる俺の時間を奪ってるんだってわかってる？ わかってたらこんなミス繰り返さねえわな。

……まあ何でもいいや。これ、追加の仕事。明日までに頼むね」

花野 「え、あの、一人で……ですか」

男2 「女の子の君にはわからないかもだけど、俺たちは他の仕事もやってるんだよ。これは最低限の仕事。その最低限すら君はできてないんだよ」

照明、変わる

秀人 「……」

花野 「話聞いてもらっちゃってごめんね。

うまくいかないことつて立て続けに起こるのよね。そんなことに泣いてたって、しかたないのに、なんか、こう、ね。あはは、おかしいね」

秀人 「いえ、あの、何もできなくて申し訳ないです」

少しの間の沈黙が流れる

秀人 「僕、彼女がいるんです。頑張り屋で真面目で、でも気さくで明るくて僕にはもったいないくらいいの彼女で」

花野 「うん」

秀人 「人のことをよく見てて、僕が落ち込んでると励ましてくれるんです。甘いもの一緒に食べながら。甘いものの中でも、ドーナツが好きなんですよ。あの、ドーナツ食べますか？」

花野 「え、あ、ああ、うん？」

秀人 「最近コンビニでもドーナツが売っていいですよ。僕、嫌なことがあった時にはいつもドーナツを食べるんですよ。ほら、ドーナツつて

丸いでしょ」

花野「……うん？」

秀人「ドーナツは丸なんです。どれだけダメなことが
いっぱい起こっても、ドーナツの丸は絶対、×
にはならないんです。だから自分の人生も長い
目で見たらきつと丸になる。正解になる。そん
なふうに思うんです」

花野「うん」

秀人「いや、もちろん食べちゃったら丸くなくなるん
ですけど。そもそも地球だって丸いままで何十
億年って存在していて、それで、自分のダメな
こととか恥ずかしいこととかってそのうちの何
十億分の一の出来事ではない。百年たてば僕
はもう生きてないし、僕の失敗を知っている人
もきつと生きてない。

そう思ったら、今日起こったことも本当に小さ
なことではない、と思うんです。だから、自
分はもつと大きなことがやりたくて、そんな小
さなことにかまってたって仕方ないって」

花野「……君、励ますの下手でしょ」

秀人「すみません」

花野「ううん。励ましたいのは伝わったし、実際聞い

てもらえて少しだけ余裕も出てきた」

秀人「よかったです……」

花野「よーし！ 明日もきつと、頑張ろ！」

秀人、割引券を差し出す

秀人「もしまた辛いことがあったら、話聞きます。

お店でも美味しいコーヒーとかお菓子とか出す
ので、またぜひ来てください。待ってます」

花野「……秀人君もなかなか営業が上手いわね。で
もありがとう」

花野、割引券を受け取り退場する

美桜、秀人に近づく

美桜「……ねえ、浮気してない？」

秀人「え？」

美桜「この前のバイトの帰り、綺麗な女の人と歩いて
たでしょ。浮気？」

秀人「ちがう！ あれは店のお客さん！」

美桜「ふーん？」

秀人「確かに二人きりだったのは、ごめんなさい」

美桜「……いいよ。秀人は浮気なんかしないだろうし。

ごめんね。カマかけたの。直紀先輩から話は聞
いてる」

秀人「じゃあなんで」

美桜「連絡ぐらいしてよ！ 心配するでしょ」

秀人「ごめん」

美桜「まあ、誰にでも優しいのは秀人の良いところだ
からね。放っておけなかったんでしょ」

秀人「うん……でもさ、人を励ますのって難しいね。

うまく言葉が出てこないっていうか」

美桜「でも、きつと。気持ちには伝わってるよ」

美桜、退場

藪医者、入場

医者「うまく言葉が出てこない……ですか。なるほど

恐らく大脳の機能が上手く働いていないのかも

しれませんね」

秀人「大脳……」

医者「言語や運動能力にはもちろん個人差があります。

貴方の場合は日常生活にはそれほど影響がある

わけではないでしょう。しかし、肝心なところ

で言葉が出てこない、というのは過度な緊張や

マルチワークの際に脳内の命令伝達が遅れてし
まうということ。以前の手術と同じように、今
度は大脳に電気手術を行えば神経伝達が促進さ
れます。言語能力だけでなく、運動機能の改善
等も期待できるはずです」

秀人「……でも、あまりお金が残っていないくて。今回
も保険適用外ですよ」

医者「そうですね。もし手術をするのであれば、この
同意書にサインをお願いします」

医者退場。

有希、入場

七海、後ろから有希に呼びかける

七海「有希ちゃん！ おはよう！」

有希「あ……」

七海「あ！ リョウもおはよう！ え、ミカ、おはよ

う！ 今日めっちゃ髪可愛い！」

有希、言葉が続けようとする

七海、そのまま走り去る

有希「……あ」

場面、有希の家

有希「すみません、先生。この問題が解けなくて」

秀人「ああ、その問題はこの公式を使うんだ。それで……」

秀人、答えをノートに書く

有希「ありがとうございます！」

秀人「これと似たような問題がこれだから、やっておいてね」

有希「はい」

秀人、有希の勉強を見守っている

有希、手を止める

有希「先生、質問があるんですけど……」

秀人「うん？ どの問題？」

有希「あの、勉強のことではなくて」

秀人「うん」

有希「学校のことなんです。すみません。やっぱり駄

目ですよね」

秀人「いや。相談したいことがあるなら、言ってほしいな。気になったことが残り続けると、勉強も他のことも手につかなくなっちゃうと思うし」

有希「あ、ごめんなさい。あの、その……学校で、上手く人と話せなくて」

秀人「上手く、話せない」

有希「いざ、人と話そうとすると言葉が出てこないんです。あがり症というか、緊張ばかりで」

秀人「そっか……」

有希「本当はもつとうまく喋れるようになって、友達に欲しいと思うんですけど……」

秀人「……（何か考え込む）……でも、今は僕とちゃんと話せてるよ」

有希「それは、先生が、話しやすい人だから……」

人と話すときに、相手の目を見てると早く話さなきゃって思っちゃって、したら、言葉が上手く出てこなくて、段々相手が私の話に飽きてるような気がして、それで、その」

秀人「でもたぶん、有希さんは最初の一言が出せれば人とも臆せずに話せるようになる」

有希「最初の一言？」

秀人「何でもいいんだ。挨拶でもなんでも。相手の目を見て、ちゃんとおはようって言えたら変わると思うよ」

有希「本当に、それだけで変わりますか……？」

秀人「変わる。嘘だと思えば一度やってみて、それでダメなら僕に文句言つてよ。ね」

有希「……はい」

場面、学校

有希、入場

七海、入場

七海「有希ちゃん、おはよう」

有希「あ……」

七海「ミカ、おはよう」

七海、教室に入ろうとする

有希「あの……おはよう！」

七海「……有希ちゃん、今私に言った？」

有希「えっと、はい」

七海「おはよう！ 有希ちゃん！」

有希「おはよう……七海、さん」

七海「え、今日何かいいことあった？ めっちゃ元気じゃん！」

有希「あ、その、良いことがあったわけじゃなくて、その、えっと、今日こそがんばろ、って思つて」

七海「え〜！ いいね！」

七海、有希、教室に入っていく。

照明、夕暮れに変わる

有希、七海、椅子に座る

直紀、席に注文を取りに行く

直紀「ご注文は以上でよろしいですか？」

七海「はい、大丈夫です」

直紀、退場

七海「有希ちゃん、めっちゃ勉強できるんだね！ すっごい分かりやすい！」

有希「ううん、そんなことないよ」

七海「そんなことあるって。すごいよ！ 私次のテスト」

トは補修受けなくて済むかも！」

二人、笑う

七海「有希ちゃんは塾とか行ってるの？」

有希「ううん。週に一度、家庭教師の先生が来てくれるの」

直紀「こちらストロベリーパフェとキャラメルパンケーキです。コーヒーはこちらに失礼しますね」

有希「ん！ すっごくおいしい！」

七海「でしょ！ 私、たまにここに来るんだあ。

って言うってもお小遣い貰えた時とか、バイトの給料が入った時だけなんだけどね」

有希「バイト、してるの？」

七海「あ、喋っちゃった……先生とか同じクラスの子には内緒ね！」

有希「……うん！」

七海「でも有希ちゃん本当にすごいね。私、馬鹿だからさ、この前のミニテストも追追追追追追試受けちゃったんだよー？ でも今日聞いてめっちゃわかりやすかった！」

有希「七海ちゃんこそ。こんなにおしゃれなお店知っ

てるなんてすごいよ」

七海「補修受けた帰りとかに、一人で来てるんだ。あと塾に行くまでの時間潰すときとか。友達連れてきたのは今日が初めて」

店のチャイム、祥吾入場

秀人、奥から出てくる

秀人「いらっしやいませ」

有希「え、先生？」

七海「先生？」

祥吾「あの、面接の予定で電話していた……」

秀人「ああ、面接ですね。今案内しますね」

秀人、祥吾を奥につれていく

秀人、水の入ったピッチャーを持って入ってくる

有希「先生！」

秀人「あ、え、有希さん」

有希「……ここでも働いてるんですね」

七海「えっと、有希ちゃん？」

有希「七海ちゃん、あの、この人が私に勉強教えてく

れてる家庭教師の先生……です」

七海「そうなんだ！ あの、私、有希ちゃんの友達のはず」

七海「さっき、注文取りに来た人」

有希「まさか、教えてる子が来ると思わなかったからびっくりしちゃった」

有希「……あの、声を荒げて、すみませんでした」

秀人「心配しないで。君もゆっくり過ごしてね」

秀人、退場する

七海「ね！ あの人のこと好きなの？」

有希「ち、違うよ！ 尊敬してるだけ！」

七海「そっかあ。私と同じかなあと思ったんだけど」

有希「同じって？」

七海「……私ね、このお店の店員さんに好きな人がいるの」

有希「え！」

七海「さっき、注文取りに来た人」

有希「パフェとパンケーキ届けてくれた人？」

七海「うん」

有希「そうなんだ……。でも有希ちゃん可愛いし綺麗だし、うまくいくと思うけど。あ、でも高校生

だから、付き合うのは難しいのかな」

七海「少しでも覚えててくれないかなあって、できるだけこのお店に来てるんだ。

このコーヒーターって、あの人が淹れてるんだって！ コーヒーもブラックで飲めるように頑張ってるの！

……ね、本当にさっきの人好きじゃないの？」

有希「違うって！」

七海「でも有希ちゃんしっかりしてるし、眼鏡外せばほら！ 可愛いから大丈夫だと思うんだけどな」

有希「もう！」

七海「あのね、私がこのお店に来るようになった、ちよつと後から入ってきたんだよ」

有希「え？」

七海「一番最初にあつた時は、注文間違えたりとかしてたんだけど、最近じゃすつこくよく動いてて、すごいなあって思ってたんだよ」

有希「先生が……？」

七海「あー？ やっぱ興味あるんじゃない？」

有希「だから！ ちがうってば！」

有希、退場
照明、夜に変わる

秀人「……外、もう真っ暗だけど、帰らなくていいの？」

七海「あ、もう、お店閉まりますか？」

秀人「いや、もうちよつとやってるけど。有希さんも帰ったみたいだし、女の子が一人で大丈夫かな
って」

七海「大丈夫です」

秀人「そっか……家の近くまで送っていいこうか」

七海「大丈夫です」

秀人、退場

女1、スーツで入場

女1「七海、おかえりなさい」

七海「おかあさん、もお帰り。あれ、今日ってゆつくりできるって言ってなかった？」

女1「ごめんね、急遽仕事が入っちゃって。これからまた会議で出かねきゃいけないの。ご飯は作ってあるから、温めて食べてね」

七海「うん。頑張ってるね」

女1「お金は足りてる？ ご飯ちゃんと食べられて

る？」

七海「うん」

女1「学校はどう？ 楽しくやれてる？」

七海「うん。友達もいっぱいいるし大丈夫だよ」

女1「塾にもちゃんと行ってる？」

七海「……うん。それでね、お母さんあのね、塾のこと
とんだけど」

電話の着信音が鳴る

女1「ああ！ もう！ ごめん、七海、帰ってきたら
聞くから！」

女1、退場

七海「うん……行つてらっしゃい」

七海、退場

医者、秀人、入場

秀人「モニター価格……ですか？」

医者「はい。流石に保険適用外ですと金額も大きくなってしまいますから。モニター価格として、数人に手術をして宣伝になっていただければと思っ
っているのです」

秀人「なるほど、でも、どうして僕に？」

医者「当院で最も脳整形手術をされた患者さんでしたので……。ああ！追加で手術していただく必要はないんです。まずは今まで受けた手術への感想等を書いていただければ十分ですよ」

秀人「それなら……」

医者、退場

美桜、入場

美桜「秀人、私に何か隠してる？」

秀人「え」

美桜「最近、すごく働いてるから。カフェだけじゃなくて家庭教師の仕事も始めたでしょ？」

秀人「ああ！うん、ちよっとね。今度、美桜の誕生日でしょ？だから、それに向けて色々できるように」

美桜「張り切ってくれるのは嬉しいけど、それで倒れたりされたら嫌だからね！私だってバイトしてるんだから、無理しないで」

秀人「うん」

美桜「最近、秀人がすごく頑張ってるのはわかるんだけど、本当に無理しないでほしいの」

秀人「無理はしてないよ」

美桜「でも、最近遅刻したり仕事のミスも減ったって先輩が言ってたし、明るくなった気がするし、なんか、変わったなあってすごく思う」

秀人「心配しないでよ。働くのに慣れてきただけだつて」

美桜「……ね、変わらないでね。秀人は秀人のままでいてね」

秀人「美桜、きつと疲れてるんだよ。僕はそんなに変わったりしないよ」

美桜「……そっか」

秀人「美桜、お疲れ様」

美桜「秀人も、お疲れ様」

美桜、退場

秀人「……言えないな」

直紀、祥吾、入場

直紀「秀人！ ちよつと来てくれるか？」

秀人「はい」

直紀「こちら、今日からここで働く祥吾君だ」

祥吾「よろしくお願いします！」

直紀「秀人、先輩として色々教えてやってくれ。今日

は店内挨拶と食器類の下げ方を教えてくれれば

いい。よろしくな」

秀人「はい！ よろしくね、祥吾君」

祥吾「よろしくお願いします、秀人先輩！」

花野、来店する

二人「いらっしやいませ！」

花野「あら、新人さん？」

秀人「そうなんです。今日から。花野さんもお元気そ

うで」

花野「おかげさまで。今日は仕事もうまくいったの」

花野、椅子に座る

祥吾「こちらメニューです」

花野「ありがとう」

七海、入店

祥吾「いらっしやいませ！」

七海、椅子に座る

メニューを見た後、注文する

祥吾「それでは繰り返しますね。キャラメルパンケ

キがお一つとミルクコーヒーがお一つでよろし

いですか？」

七海「はい、お願いします」

直紀「秀人、祥吾君に注文の取り方も教えたのか」

秀人「いえ、どんどん自分で動いてくれて……」

直紀「そうか、でも助かるよ。秀人も頑張ってくれよ」

秀人「はい」

祥吾「いらっしやいませ！」

秀人以外、全員退場

医者、入場

医者「なるほど。愛嬌の良さ、ですか」

秀人「やっぱり手術でも難しいですかね」

医者「いえ、できないことはありませんよ。ただ、一

概に愛嬌の良さ、と言っても色々な意味を含みますから。例えば自信があることで生まれるカリスマ性とか、細やかな気遣いによる繊細さなんかも人によっては愛嬌でしょう。人に好かれる要素、というのは一つの能力をあげたからと言って身につくものではないのですよ」

秀人「……じゃあ、全部でお願いします」

医者「全部、ですか。ですが費用もその分だけ大きくなりますよ」

秀人「それなら、つけてもらった能力でまた感想を書きます。宣伝になるように、そしたら、モニタ―価格になりませんか……？」

医者「……そうですね。わかりました。少し考えてみますね。一応、こちらの書類にサインをお願いします」

します。くれぐれもよく注意書きを読んで、よく考えてからの手術をお勧めします」

医者、退場

美桜、入場

秀人、美桜にプレゼント渡す

秀人「美桜、お誕生日おめでとう」

美桜「ありがとう、え、これ。開けてもいい？」

プレゼントは綺麗な指輪だった

美桜「すごい綺麗……。ありがとう」

秀人「これが美桜に似合うかなあって思ってた。安いけど婚約指輪の代わり」

美桜「私たち、まだ学生だけど？」

秀人「美桜、すごい綺麗だろ。他の人にとられちゃうかもだし、今から、予約ってことで」

美桜「予約……？」

秀人「いつかはちゃんとした指輪渡すからさ。これは今の給料三カ月分てことで……なんてね」

美桜「……本当に大事にする！ 本当にありがとう！」

私は秀人が私のために頑張ってくれてうれしい。
だから秀人の誕生日には私もっと頑張るから
ね！」

秀人「うん。今から楽しみにしてる」

美桜、退場する

有希、入場

有希「先生、ここってこれであってますか？」

秀人「うん。勿論その解き方でもできるんだけど、こ

っちの方が簡単に解けるよ」

有希「ありがとうございます！」

秀人「最近、ちゃんと人と話せてる？」

有希「はい。七海ちゃんともよく話すようになりまし
たし、ミカちゃんとかリョウ君とかと遊びに行
ったりもしてます」

秀人「そっか。楽しそうでよかった。でも勉強もおろ

そかにしちゃだめだよ？」

有希「はい！……：そいえば、七海ちゃん今度生徒会

選挙に出るって言ってました」

秀人「へえ。すごい子だね」

有希「そうなんです。私が上手く話せない時も忘れず

に挨拶してくれてたし、人の良い所見つけるの
が上手だったりして、すごく素敵な子なんです」

秀人「友達になれてよかったね」

有希「はい！」

有希、退場

直紀、入場

直紀「秀人、お前本当に変わったな」

秀人「そうですか？」

直紀「細かいところに気が付くようになったし、接客
中の笑顔も絶やさなくなったし」

秀人「ありがとうございます。先輩の指導のおかげで
すよ」

直紀「可愛い奴め。全く」

祥吾、入場

祥吾「秀人先輩、すみません。ちょっとわからないこ

とがあつて……」

秀人「今行くよ」

直紀、退場

入店音とともに、彰、入場

祥吾「あ、いらっしやいませ……」

秀人「いらっしやいませ！」

彰、無視して椅子に座る

少しくたびれたスーツを着ている

秀人「誰に対しても、どんな時でも入ってくるお客さ

んには笑顔で、大きな声で挨拶。な？」

祥吾「はい……」

秀人「じゃあ、注文取ってきて」

祥吾、彰の席に注文を取りに行く

秀人、彰の席に料理を運ぶ

秀人「お久しぶりです。お元気でしたか」

彰「……おかげさまで」

秀人「こちらナポリタンです」

彰「あ……」

秀人「どうかなさいましたか？」

彰「いや、あの、頼んだものと違ったので」

秀人「……失礼しました。ご注文いただいたのはナポリタンではありませんでしたか？」

彰「すみません。頼んだのはミートスパゲティの方です……すみません。ちゃんと伝えられなかったのかもしれないね。すみません」

秀人「新しく作り直しますよ」

彰「いえ、本当に、大丈夫です。このままいただきます。すみません」

秀人「そうですか……」

秀人、祥吾ににじり寄る

秀人「注文間違ってた」

祥吾「すみません……」

秀人「今回はお客さんがそれでいいって言ってくれたから。次は気を付けるよ？」

祥吾「……はい」

直紀、入場

直紀「どうした。何かあったのか」

秀人「いえ、何もありません」

彰、手を挙げて店員を呼ぶ
祥吾それに応える

直紀「祥吾君もまだ始めて一カ月くらいなんだ。うま

く動けないこともある。長い目で見てやれよ」

秀人「わかってます」

祥吾「先輩すみません。コンセントつてどこにありますか？」

秀人「机の下。前も言っただろ。メモしておけよ」

祥吾「すみません」

祥吾、彰に伝えに行く

直紀「秀人、お前だって似たようなこと最初にしてた

だろ。あんまりイライラした態度を取るな」

秀人「でも」

直紀「何度も言うが、初めて一カ月だからな？

まだ遅刻もしたことがない。ミスはあるけど、よく働いてる方だよ」

秀人「……先輩は変わりましたね」

直紀「はあ？」

秀人「何でもないです」

秀人以外、全員退場

医者、入場

医者「こちらは前回、宣伝いただいた分のお礼金です」

秀人「……こんなに貰えるんですか」

医者「ええ。秀人さんのおかげで新規の患者さんが増えましてね。多種多様な整形が求められるようになってきました。前回秀人さんが受けた手術は治験としての目的もあつたので……」

秀人「じゃあ、今日入った分のお金で、また新しい手術をお願いします。治験でも宣伝でも何でもします」

直紀、入場

直紀「秀人、もっと心に余裕を持って。客のことを思うのは接客で一番大事だ。でも今のお前はイライラした感情が全部客に伝わる。いったん落ち着いて休みでも取れよ」

直紀「秀人、もっと心に余裕を持って。客のことを思うのは接客で一番大事だ。でも今のお前はイライラした感情が全部客に伝わる。いったん落ち着いて休みでも取れよ」

直紀「秀人、もっと心に余裕を持って。客のことを思うのは接客で一番大事だ。でも今のお前はイライラした感情が全部客に伝わる。いったん落ち着いて休みでも取れよ」

直紀「秀人、もっと心に余裕を持って。客のことを思うのは接客で一番大事だ。でも今のお前はイライラした感情が全部客に伝わる。いったん落ち着いて休みでも取れよ」

秀人「自分の感情を誤魔化す能力が欲しいんです」
医者「であれば、大脳辺縁系の手術を」

有希、入場

有希「私も先生みたいに頭が良くて、人のことを思いやれる優しさが欲しい。どうしたらいいですか？」

秀人「もつと頭が良くなりたいです。一度覚えたことを忘れないような」

医者「では大脳の手術をしましょう。加えて大脳皮質にも刺激を加えます」

美桜、入場

美桜「秀人、これ以上すぐくならなくていいよ。頑張らなくていいよ。優しい秀人でいて欲しいな」

秀人「優しさが欲しいんです。誰かの相談に、すぐに解決策を出してあげられるような」

医者「ならば合理的判断力の向上手術をしましょう」

暗転、秀人以外全員退場する。

秀人、スポットライトが当たる

秀人「ずっと、変わりたいと思っていました。ダメな自分を変えたいと思っていました。

自分のことでもいつも手一杯。

なにをやってもうまくいかなくて、物覚えも悪くて、周りに迷惑をかけてばかり。

いつか、周りの人に呆れられて、一人になっちゃう気がして。

そんな自分でも周りの人のために動けるような、ヒーローのような自分になりたいと思ってました。

いい歳して、かっこ悪い願いですけど」

高校生四人（七海と他三人）下手から上手に登校する
四人の後ろから有希が憂鬱そうに登校する

七海と有希は秀人を見て立ち止まる

上手から下手に向かって面接に向かう男性（彰）
上手から下手に向かって通勤する女性（花野）

花野と彰、秀人を見て立ち止まる

下手から上手に向かって一歩く直紀

祥吾、高校の制服を着て通学する

美桜、歩いている

祥吾、秀人を見て立ち止まる。

秀人「脳整形手術は、僕を変えてくれたんです。

時間が守れて、ミスをしなくて、人の相談に乗

れて、信頼されて、優しい。

そんな僕に変わることが出来ました。

今の僕は一度聞いたことは忘れないし、勉強だ

って運動だってできる！

僕は今幸せです。幸せです！

もしこれを見て、変わりたいと思った人は絶対

に手術をするべきです！

なりたいたいと思った自分に、簡単に生まれ変わる

ことが出来るんだから」

有希と花野、退場する

秀人、椅子に座る

彰と七海、椅子に座った秀人を眺め続ける。

七海「……これなら」

七海、彰、退場する

美桜、入場する

美桜「秀人」

秀人「どうしたの？ 美桜」

美桜「私に、何か隠していることない？」

秀人「何も隠してないよ」

美桜「そっか……」

秀人「……ねえ美桜。整形ってどう思う？」

美桜「なんで？ 整形、したいの？」

秀人「最近、仕事もうまくいくようになってきたし、

大学の講義にもちゃんとついていけるし。でも

なんか足りなくてさ。で、直紀先輩とか祥吾君

見てて思ったんだよね。あと俺に必要なのって

かっこいい顔かなあって」

美桜「それだけ……？」

秀人「それだけって何？ 結構真剣に悩んでるんだけ

どなあ」

美桜「顔のことで悪口謂われたとか、いじめられたとかじゃないんだ」

秀人「なにそれ。悪口謂われたり虐められたりしなきゃ、美容整形ってしちゃいけない？」

美桜「いや、別に。ごめん」

秀人「そういえばさ。美桜もプチ整形したいって言うてなかったっけ」

美桜「……今は、別にしたいわけじゃ」

秀人「一緒にしない？」

美桜「はあ？」

秀人「一緒にやったら怖くないじゃん。それに美桜も今よりもっときれいになれるんだよ。絶対得じゃん」

美桜「……」

秀人「なに？ どうかした？」

美桜「ねえ、教えて。私、整形した方が良い？」

秀人「だから、一緒にしようって誘ってるんじゃない」

美桜、秀人の頬を強く叩く

秀人「何すんだよ」

美桜「秀人、変わったね」

秀人「は？」

美桜「なんで変わっちゃったの？ 私は優しい秀人が好きだった。時間が守れなくても、ミスが多くても、話下手でも。私を思いやつてくれて、いつも周りの人のことを考えて、欲しい言葉をくれる秀人が好きだった。

私が好きだった秀人は、もっと人の気持ちがかかる人だったよ。

だから人が傷つくことを絶対にしない人だった。言わない人だった」

秀人「……だから、周りの人のためにもっと最善の俺でいたいんだよ。だから変わった。それって駄目なこと？」

美桜「秀人、きつとそこに私たち周りの人ためなんて存在してないよ。」

秀人「ねえ、なりたい自分に変わることって、何か悪いことある？」

美桜「……」

秀人「どうしてなりたい自分に変ろうとしちゃいけない？」

美桜「それは本当に秀人のなりたかった姿なの？」

秀人「なにそれ。それって結局、君らの都合のいい存

在が欲しかっただけじゃん。俺じゃなくても、都合が良ければだれでもよかったでしょ？ 俺が君の意図しない方向に変わろうとしてるから止めただけじゃん」

美桜「……ごめん。そうだね。ごめん。」

ねえ、私たち、もうやっていけないよ」

秀人「勝手にすれば？ 美桜がそう変わりたいなら、俺は止めないよ」

美桜、退場

医者、入場

医者「……人の気持ちが変わるように、ですか」

秀人「できませんか」

医者「いえ、今まで以上に難しい手術になりそうだなと」

秀人「お金ならバイトも増やしたし、今までもらった分もある。足りなければそれ以上に稼いできます」

医者「……そうですか」

秀人「どんな手術になるんですか」

医者「共感性を高める手術です。生物の脳は筋肉や骨

を動かすのに電気信号を用いて命令します。今まで整形で電気刺激を用いていたのは、その電気信号に疑似的な命令を送り、脳を活性化させていたのです。

それは人間が感情を表に出すときもそうです。感情というのは電気信号を発しているのです」

秀人「つまり……」

医者「はい。その感情の電気信号を受信する機能を向上させればいいんです。電波塔が発信した信号を家の屋根のアンテナが受信するような感じですよ。実はその機能は人間の脳には必ずついています。しかし、普段はその機能を使うことは殆どありません。

これは受容体を活性化させるため、難しい手術になりますよ……」

秀人「大丈夫です。手術にも同意します」

医者「……わかりました。大きい手術のため数日前から入院していただくことになると思っています。こちらの紙にサインをお願いします」

秀人、渡された紙にすぐにサインをする。

医者、サインを確認して退場

直紀、祥吾入場

秀人「すみません。少し大きな手術をするので数日間

お休みを頂けませんか」

祥吾「僕は全然かまわないですが……」

直紀「それより秀人、何か病気にかったのか。入院
ってどういうことだ」

秀人「いや、病気じゃありません。心配するようなこ
とは何もないので大丈夫ですよ」

直紀「……嘘はつかないでくれよ。バイトはお前が休
む分、俺が出てやれる。でも病気は変わってや
れないんだから」

秀人「だから、大丈夫ですって。心配しないでくださ
いよ」

秀人退場

祥吾「……秀人先輩」

祥吾、直紀、退場
有希、入場

女2「有希ちゃん？ 晩御飯できたよ」

有希「はい」

女2「そういえば秀人先生から連絡来てたわよ。少し
の間、家庭教師はお休みするんですって」

有希「え？」

女2「体調がすぐれなくてお休みするんですって。有
希ちゃんも気を付けなきゃねえ」

有希「そういえば、七海ちゃんもずっと体調が悪いつ
て学校休んでる」

女2「あら、なにか良くないものでも流行ってるのか
しら……」

有希「……ご馳走様！」

有希、携帯を取り出し電話を掛ける

有希「もしもし、七海ちゃん？ 有希です。

留守電、聞いているかな。

体の具合はどうですか？

学校でね、皆、七海ちゃんのこと心配してるよ。
私も、心配してる。七海ちゃんの顔が見たい。
……また、電話かけるね。無理しないでね」

秀人、携帯で電話をかけている

秀人「もしもし、美桜？」

「今までごめん。もっとと美桜のこと考えればよかつたって反省してる。」

「いまさら言ったって仕方ないんだけどさ。」

「俺、もっと変わる。美桜のために変わるよ。」

「だから、もし許してくれるなら、三日後に会いに来てくれないか」

医者、入場する

医者「手術は成功しました」

秀人「そうですか……なんだか頭がぼんやりします」

医者「まだ、麻酔が切れていないようですね。」

「時間がたてば思考もはっきりしてきますよ」

秀人「はい」

医者、退場する

彰、入場する

秀人「……貴方は」

彰「秀人さんの宣伝を見て、僕も脳整形を受けに来たんです」

秀人「そうですか……」

彰「手術をするの、怖くないですか。なんだか僕は僕が僕じゃなくなってしまう気がして……」

秀人「大丈夫ですよ、僕は手術をしても僕のままです。きつと貴方は貴方です」

彰『怖い、こわい、こわい』

秀人「え？」

彰「どうしましたか……」

秀人「今、喋りましたか」

彰「いや、喋ってないです。その、そろそろ失礼しますね」

彰、退場

美桜『秀人』

美桜、入場

秀人「美桜？」

美桜「留守電聞いたの。私のために変わるって」

美桜『私、そんなこと頼んでない』

美桜「私、そんなこと頼んでない」

秀人「うん、うん」

美桜『変わらないで。変わらないでよ』

秀人「うん、うん」

美桜「秀人、ちよっと、大丈夫？」

秀人「成功したんだ！ 手術成功したんだよ！」

美桜「はあ？」

美桜『なにか病気だったの……？』

秀人「病気とかじゃないよ、整形手術。

脳の、整形手術」

美桜「そんなことしてたの……？」

秀人「これで美桜の言いたいことも分かるようになった。他の人の気持ちだって、わかるようになったんだ！」

秀人、大爆笑

美桜は混乱したように秀人を見ている

女1、2、秀人を見て気味悪がっている

女1『なにあれ、気持ちわる』

秀人「はあ？ 何見てんだ！」

女1「ね、行こ」

女2「う、うん」

二人は走り去っていく

女2『なにあのキチガイ……こわい！』

秀人「誰が気違いだよ！ おれは！」

美桜「秀人、もうやめてよ！」

美桜、秀人の手を引っ張る

秀人、思い切り転ぶ

道行く人の声が聞こえるようになる

1 『うわあ、何あれ、気持ちわる』

2 『こわい』

3 『近づきたくない』

4 『彼女さんかわいそー。よくあんなのと付き合ってたられるな』

5 『絶対近づいちゃだめよ。子どもたちを守らないと』

6 『気持ち悪い』

- 7 『気違い』
8 『変態』
9 『死ね』
10 『ああいうやつ、消えてほしい』
11 『怖い』
12 『オモシロ、動画とつとくか』
13 『誰か警察に通報しろよ』
14 『死んでほしい』

男1 「あれ、アイツ、脳整形宣伝してた秀人とかいうやつじゃないか」

15. 『なに？ じゃああれは手術に失敗したってこと？』
16. 『なんでもいいけど、すげえ迷惑だな』
17. 『僕は幸せです！ (笑)』
18. 『マジじゃん。やっぱ (笑)』

心の声は笑い声が反響する

何度も同じ声が、連続して重なるように聞こえる

(1〜18までの声を何度も流す)

沢山の声で秀人の頭の中は埋め尽くされて痛みが走る

美桜 「秀人？ 大丈夫？ 聞こえる？」

美桜は懸命に秀人に呼びかける

秀人には美桜の声は聞こえていない

秀人 「笑うな、やめろ、近づくな、うるさい、うるさい、だまれ……」

ゆっくり暗転していく

直紀、祥吾、花野、有希、美桜、入場

秀人は椅子に座ったまま目を閉じている

有希 「私、先生のことずっと憧れてたんです。それなのに、それなのに。どうして、変わらなかったんですか。七海ちゃんのことだって、どうしてあんなことを言ったんですか……許さないですからね」

花野 「結局君は、ドーナツの丸じゃあ満足しなかったんだね。どうしたら君は満足したのかな。それとももう、誰の言葉も聞こえなくなってたのか

な」

直紀「嘘つくくなって、言ったよな。もっと心に余裕を

持てって言ったよな。なんで話聞いてないんだよ。秀人、変わらないな……人の話を聞けよ。

俺の言ったことを覚えてくれよ」

美桜「変わらなくていいって言ったじゃない。そのままの貴方で十分なのに。私は貴方にとって何だったの？ 私は、少しでも貴方の心の中にいられたのかな……？」

祥吾「先輩、戻ってきてください」

美桜と秀人以外、全員退場

医者、入場

美桜「先生、秀人は助かるんでしょうか」

医者「今現在、秀人君は人間の感情の渦の中にいます」

美桜「……先生。ふざけられても困ります」

医者「ふざけていませんよ。彼は治療と称して人の気持ちが変わるように手術を受けたんです。今は人の感情を受信しすぎて、その感情に振り回されているんです」

美桜「……なんでそんな手術を」

医者「変わりたいと仰っていました」

美桜「そう、ですか。秀人は、戻れますか」

医者「戻る、とは」

美桜「脳整形をする前に、戻してほしいんです。ミスばかりで遅刻も多くて、でも優しくかったころの秀人に」

医者「……大変失礼ですが、元に戻す方法はありません。美桜さん。それに、貴方は秀人さんのご家族ではないでしょう」

美桜「でも、学生だけど、でも……婚約まではしました」

医者「婚約者は、家族ではないんですよ。では元に戻る手段があったとして、貴方は家族ではない秀人さんのために高額な手術費用を出せますか？ 保険適用外なんです。

秀人さんは整形手術をする前に、この手術でいかなる弊害を被ろうと当院は責任を負わないという書類にサインをしました。

勿論手術をする前に私どもも十分な説明をしたうえで、です」

美桜「そんな」

医者「そしてこれは整形手術です。整形したものは治

「せないんですよ。自己回復を祈るしかありません」

医者、美桜、退場

七海、入場

有希、入場

七海「いらっしやい、ませ」

有希「七海ちゃん、ここで働いてただね」

七海「うん、最近、ちよつとバイトを増やしたの」

有希「学校に來られてないのも、そのせい？」

七海「……あのね、学校、やめようかと思ってるの」

有希「え？」

七海「お母さんね、ずっとずっと、働いてるの。私の学費を稼ぐために。わたし、塾も行かせてもらってる」

有希「うん」

七海「でね、どうにかしてお母さんのためにいい大学に行きたいと思ってたんだけど、私、馬鹿でさ」

有希「そんなこと……」

七海「塾行かせてもらってるのに、授業にはついていけないし、テストは悪い点ばかりだし、いっ

つも補習受けてて。そのたびに、お金無駄にしてるんだって。

友達だけが多いと思ってたから、生徒会に入ったら内申上がったりしないかなって。勉強できないけど、推薦貰えないかなって」

有希「うん」

七海「でも、生徒会選挙で落選しちゃった。

人望とか賢さとか、いろいろ足りてないのはわかったの。でも、もしかしたらッて思ったの」

七海、スマホを有希に渡す

スマホから音声が流れる

秀人『今の僕は一度聞いたことは忘れないし、勉強だつて運動だつてできる！
僕は今幸せです。幸せです！

もしこれを見て、変わりたいと思った人は絶対に手術をするべきです！

なりたいたいと思った自分に、簡単に生まれ変わることが出来るんだから』

有希「なにこれ……」

七海「脳整形したら、私ももつと勉強できるようにな

るし、皆から頼られるような人間になれると思
った。でも、整形ってお金かかるんだね。あんな
にかかるなんて知らなくて、お母さんにこれ
以上お金要求したくないし、だからバイトいっ
ぱいして少しでもお金貯めたくて。それで」

有希「……学校辞めちゃうの？」

七海「……どうしたらいいかわからない」

有希「私は、辞めないでほしい。」

七海「有希ちゃんにはわからないよね。有希ちゃんは
頭がいいもんね」

有希「でも七海ちゃんにもわからないでしょ？ 私が
どんな気持ちで、一人で学校で過ごしてたか」

七海「……え？」

有希「私ね、人とうまく話せないの。七海ちゃんみた
いに自分から周りの話を引き出してくれたり、
うまく巻き込んでくれたりしなきゃ、うまく話
せない。」

七海ちゃんのおかげで、クラスのみんなとも少
しは話せるようになった。でも七海ちゃんが学
校に来なくなってから、またうまく話せなくな
っちゃった。

頭が良くて、運動が出来ても、人と話せなか

ったら意味ないんだよ。勉強も運動もちゃんと
した先生がいて、自分でも努力してついたら
身につくけど、人とのつながりは努力しても身
につかないこともあるんだよ」

七海「そんな、でも」

有希「七海ちゃんに、変わらないでほしい。変わるな
ってそんなの許さないよ。七海ちゃんはずっと
ずっと素敵で綺麗で可愛くてかっこいい、私の
あこがれなの。だから、こんな、七海ちゃんを
知らない人の言葉で変わろうとしないで。そん
なこと、許さないよ」

七海「……でも、私は馬鹿だし」

有希「私が勉強教える。だから、学校を辞めないで。」

七海「……もどつても、またみんな仲良くしてくれる
かな」

有希「大丈夫だよ」

二人、笑いあう

七海「ねえ、有希。お願いがあるんだけど」

七海はスマホを取り出し、母に電話をする
有希は七海の手を握っている

七海「もしもし、お母さん？」

「仕事中にごめんね。邪魔をする気はないんだけど、いつも話しようとしても仕事が忙しくて聞いてもらえなかったから。」

「お母さんを責めるつもりはないの。」

「私も強く言い出せなかったし。」

「あのね、塾を辞めたいの。」

「授業についていけなくなって。お金の無駄だなんて感じちゃって。」

「ううん、勉強はやめない。学校も辞めない。」

「友達がね、すぐ頭がいいんだ。」

「しばらくはその子に勉強を教わりたくて。」

「ごめん、いきなりこんな話をして。うん。」

「勉強は嫌いじゃないよ。うん。」

「じゃあ、家で待ってるね」

スマホをしまう

七海「バイトも、辞めないとだね」

二人は笑いあう

七海、有希、退場する

彰、入場する

花野、お見舞い用の花を持って入場する

花野「あの……」

彰「すみません。あの、違うんです。秀人さんが入院中だと聞いたもので」

花野「貴方もお見舞いですか」

彰「お見舞いのようなもの、です」

花野「……はあ」

彰「あの、秀人さんは、その、脳整形手術でこうな

ってしまったのでしょうか」

花野「そうだと聞いています」

彰「そうなんです」

少しの沈黙

少しの沈黙

彰「その、僕は少し前に秀人さんに助けられたことがあるんです」

花野 「助けられた……」

彰 「もともと務めていた会社が少しブラックだった

と言いますか、本当に辛くて、死んでしまおうかなあなんて考えながら過ごしていたんです。それで秀人さんが勤めているカフェで何気なく食事をしています。

帰り際に会社にとつて大事な書類をそこにおいてきてしまつて。急いで会社に連絡したんですよ。そしたら『お前はクビだ!』つて上司から言われました」

花野 「それは……」

彰 「唐突なこと、頭がいつぱいで。

でもその連絡の後に秀人さんが走つて書類を届けてくれたんです。もう必要のなくなったものでした。それで秀人さんは『待ってます』つて言つてくれたんです。

そんなこと言われたら、また行かなきゃつて思うじゃないですか。でも向こうにとっては客の一人だからきつと覚えてないだろうとも思いました。

二回目に店に行ったときに、彼はすごい笑顔で迎えてくれて。元気でしたかつて。

……僕のこと、覚えててくれたんです」

花野 「私も、彼には救われました」

彰 「……貴方もでしたか」

花野 「どうしようもなく悲しいことが立て続けに起こつたんです。苦しくつて辛くつて、その時に親身に話を聞いてくれたんです」

彰 「彼が脳整形で変わることが出来たと聞いて、ダメな自分でも変わるんじゃないかって、貯めていた貯金持ち出して病院まで来たんですけど……」

花野 「怖かつたんですね」

彰 「恥ずかしながら」

花野 「私も秀人君が話を聞いていなければ、きつと脳整形をしていました」

彰 「秀人君が、ですか?」

花野 「ドーナツは好きですか?」

彰 「……はい?」

花野 「秀人君用に使ってきたんですが、多分今日も彼は起きられないでしょう。毎日持つて行つても、美桜さんが大変ですから」

二人、ドーナツを食べる

花野 「ドーナツって丸いでしょ？ だからどんなに

ダメなことが続いてても、ドーナツを食べたらそれが正解なんだって言ってもらえるような気がする。そんなふうに彼は言ってたんです」

彰 「素敵な考えですね」

花野 「地球から見たら人一人の人生なんてあつと言う間ではない。自分の人生を正解ととらえるのも不正解ととらえるのも、自分次第なんだと言われている気がしました。秀人君は話下手なので、励ますのはうまくなかったんですけど。でも元気になってほしいっていう気持ちは伝わった」

彰 「そんなふうに考えられるのに、なぜ脳整形を続けてしまったんでしょうか」

花野 「自分の言葉は自分に響かなかった。秀人君の言葉は、全て自分が誰かに言ってるほしい言葉だったんですよ。結局、自分が一番自分から逃げてた。その先が脳整形だったんでしょうね」

彰 「……僕も逃げてばかりじゃダメですね」

花野 「もう、行かれるんですか」

彰 「転職活動中でした。脳整形したらいい会社に着

けるんじゃないかと思っていたんですが、自身と向き合わなければいけないですね」

花野 「……彰さんの今後のご活躍を祈っております」

彰 「花野さんこそ、今後のご活躍お祈りします」

花野、彰、退場

直紀、入場

祥吾、入場

祥吾 「おはようございます」

直紀 「お、おう。まだ三十分前だぞ。早いな」

祥吾 「でも、秀人先輩がいない分、長く働いた方が善いじゃないですか」

直紀 「……無理はするなよ」

祥吾 「無理なんかしてませんよ」

直紀 「秀人もそう言ってたんだ。大丈夫だって。でも大丈夫じゃなかった」

祥吾 「……」

直紀 「無理しなくていい。君には君の良いところがあ
る。秀人をまねして、秀人の代わりになろうとしなくていい」

祥吾「……もう！心配し過ぎですよ！

本当に心配ないです。僕はちゃんと先輩のこと頼りにしてますから！」

直紀「そうか」

祥吾「でも、ありがとうございます」

直紀「さ、仕事しよう。客席側、頼むな」

祥吾「はい！」

直紀、退場

祥吾「いらっしやいませ！」

祥吾、退場

美桜、入場

医者（男2）、入場

美桜「治療法が、見つかったんですか？」

男2「完全な方法とは言えませんが……」

美桜「それで、秀人は治るんですか」

男2「性格はもとの彼に戻るでしょう。その代わりに、記憶が欠損する可能性があります」

美桜「今までのことを忘れてしまうということですか」

男2「これまで行ってきた手術は、電気信号によって

脳に疑似的な命令を送ることで秀人さんの性格が変わっていました。これと全く逆のことをするんです」

美桜「逆……？」

男2「今までの命令はなかったことにするんです。具体的には、電気信号を送ったという記憶を消します。海馬の部分に再度電気を流して……」

美桜「どのくらい、記憶が亡くなりますか」

男2「何とも言えません。秀人さんは手術の回数が多いですから。

この手術の後は彼に整形手術のことは思い出させないようにしましょう。思い出してしまうことで、手術後の性格が再度出てきてしまうかもしれません」

医者、退場

秀人、リハビリをしている

女2「秀人さん、あと数分回ったら病室に戻りましょうね」

秀人「はい……」

美桜、秀人と目が合う

秀人「こんにちは」

美桜「……こんにちは」

女2「美桜さん、病室までの補助をお願いしてもいいですか？」

美桜「はい、大丈夫です」

秀人「すみません」

秀人、椅子に座る

秀人「すみません、いつも来ていただいて」

美桜「いえ、気にしないでください」

秀人「まだ、思い出せないようです。落胆させてしまったようで」

美桜「いえいえ」

美桜を長い時間見つめている

美桜「……まだ何か」

秀人「すみません。貴方みたいな綺麗な婚約者がいたというのに、自殺を考えるなんて、記憶を失う

前の僕は何をしているんだろう、と」

美桜「そうですね。本当に、悲しかったんですから」

秀人「本当に申し訳ありません」

美桜「……今は具合はどうですか。頭が痛くなったりとか、ありませんか」

秀人「時折、頭が痛くなることはあります。でも医者から、大きなダメージを受けた脳が奇跡的な自己再生をしている途中だから、我慢するしかないと言われました」

美桜「無理はなさらないでくださいね」

美桜は秀人の手の指輪を見つめている

空の光が差し込み、清々しい風が吹き抜けた。

秀人「……もしもの話ですが、例えば僕の記憶が戻ら

なかったとしても、また来てくださいますか」

美桜「……ええ。来ますよ。貴方が変わらないでいてくれれば」

美桜は手に指輪を付けなおした。

終。

蛇足的解説

「誰もが世界を変えたいと思うが、誰もが自分自身を変えようとは思わない」というのはトルストイの言葉だ。

ならば救世主とは自分自身を変えてしまう力を持った人のことだろう。だが、忘れてはいけない。救世主も怪物も自分自身を変えてしまうということを。

その違いは「嫌悪」である。